
月姫 聖盾物語

ポリゴン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月姫 聖盾物語

【Nコード】

N7702I

【作者名】

ポリゴン

【あらすじ】

聖盾の乙女、リースバイフェ・ストリンドヴァリ。彼女の知られざる過去。彼女の大切な記憶。日本での任務を描く。

闇の中（前書き）

リーズバイフエがあまりにも好きだったので描いてみました。

下手ですが頑張りますのでお読みください。

闇の中

「どこだろう．．．。ここは．．．。」

混沌とした闇の中で、聖盾の乙女は言った。

「わたしは何で．．．こんな．．．。
分からない．．．。なにも．．．。」

何とか思い出そうとする乙女を、激しい頭痛が襲う。

「くっ．．．。ダメだ、意識が．．．。」

激しい頭痛が乙女を再び眠りへと誘う。

「わたしは．．．まだ．．．眠りたくは．．．。」

「．．．シ．．．オ．．．．ン」

乙女は眠りにつく。

そして舞台は移り、日本。

乙女が彼女に出会う前

真祖が彼に出会う前

時は遡る。

予告（前書き）

早くも詰まってしまったので？ 一回、今後の展開も含めて、予告風にまとめてみました。

キーワードとセリフを並べただけのものですが、楽しんで頂けたら幸いです m (_ _) m

続きは近い内に必ず出します！

予告

乙女が彼女に会う前

真祖が彼に会う前

物語は始まる

『月姫 聖盾物語』

騎士団

「お呼びですか、団長。」

「うん。ちょっとね、君に頼みたい事があって。」

「頼みたい事？」

死徒

「な、何なんだよ！あいつ！」

「あれは死徒。簡単に言えば吸血鬼さ。早く逃げないと死ぬことになるよ。」

代行者

「まさか埋葬機関まで出てくるとはな。この事件、何かあるの

か？」

「さあな、俺もよく知らん。
てくれないのさ。」

まだ見習いなんでね、詳しく教え

刀崎

「刀崎家は昔から刀鍛冶を生業としてたらくて。まあ、姉貴は
勿論、海外にいる両親だってその技術があるか怪しいけどな。」

「刀鍛冶．．．。」

固有結界

「小僧……。貴様、固有結界を。」

「生憎、こつちには時間が無くてね。さっさと片付けさせてもら
うぜ。」

混血

「そうか……。お前も化物だったわけか！」

「……………」

「なら、もう遠慮は無しだ。
うじゃないか!!」

化物同士、仲良く殺し合お

魔王

「月の魔力、そしてこの地に眠る力によって我が能力は完全に覚醒
する。」

それは、誰も知らない物語

記録には残っていない

盾の乙女と一人の少年の記憶。

もうひとつの、月姫

第一話

コンコン、 騎士団本部にある団長室。 その部屋のドアがノックされた。

「どうぞ。」

この部屋の主である団長と思われる真っ赤な髪の方は答えた。

「失礼します。 お呼びですか、 団長。」

入ってきたのは、 銀髪で中性的な顔立ちの少女。

年は16ぐらいだろうか。

「よく来てくれたね、 リーズバイフェ。 さあ、座ってくれ。」

リーズバイフェと呼ばれた少女は部屋の中央にあるソファアーに座る。

「さて。君はウチに入って何年になる。」

「は？ えっと．．．2年目ですが。」

「うん。そろそろ戦いにも、割と慣れてきた頃だと思う。そこで、君を見込んで頼みがある。」

「頼み．．．ですか？」

「先日、日本のとある町で死徒が2体ほど見つかったね。教会の手の者が片付けようとしたらしいんだが突如、消息を絶ってしまった。増援も送つたらしいが、そっちも消息不明。そこで今回は特別ということで、我々騎士団に白羽の矢が立った。」

「はあ．．．。」

「で、ここからが本題なんだが、君一人で日本に向かい、その死徒たちを討伐してきてほしい。」

「私一人で．．．ですか？」

「別に強制という訳じゃないよ。簡単に言えば試験みたいなものさ。半人前から一人前へのね。」

不気味だが、そう難しい任務でもない。」

（確かに二十七祖を相手にしたりするよりはずっとマシだ。
それに、やっと巡ってきたチャンス・・・。）

「やります。やらせて下さい。」

リーズバイフエがそう答えると、団長はにっこり笑い、

「よし、決まりだ。」

そう言った。

「出発は一週間後。目的地は日本の『二浦町』という小さな町。
健闘を祈る。」

「はい！」

元氣良く返事をする、リーズバイフエは団長室を後にした。

「埋葬機関だけじゃなく、二十七祖まで動き出したか。

さて、彼女を送ったことが吉と出るか凶と出るか・・・。

」

少女が立ち去ったあと、団長は静かにそう呟いた。

日本 二浦町

「はあ．．．。暇だなあ。」

草むらで寝転がる学生服の少年の言葉は、風の中へと溶けていった。

第一話（後書き）

さあ、やっと始まりました、聖盾物語。

文章は稚拙ですが頑張って書いていくのでよろしくお願いします

ちなみに今回出てきた『団長』というのは完全なオリキャラ。

最後の方でまた出てくる予定はありますがまだ未定です？

それまで連載を続けられるように頑張ります！

第二話（前書き）

お久しぶりです。

前回の更新からかなり時間がかかってしまいました？

申し訳ありませんm（――）m

これからはもう少し執筆速度を上げていくつもりです

これからもよろしく願いします！

第二話

「真、起きなよ。授業もう終わったよ。」

「ん．．．。」

聞き慣れた友人の声で俺は目を覚ました。

「．．．なんだ、隆一か．．．。」

「いつまで寝てるんだよ、真。もう授業終わっちゃったよ。」

周囲を見渡すと、生徒は自分達しか居らず、外を見ればもう日が沈み始めている。

「なんだ。わざわざ待ってくれてたのか？ 先に帰っても良かったのに。」

「君を部活に連れてくためだよ。まさか、また休むの？」

「．．．。」

うちの高校、二浦高校は部活動がかなり盛んで、在学生の殆どが何らかの部活に所属している。

俺が所属する剣道部は、その中でも特に盛んで、対戦成績もかなり優秀なので学校側からも期待されている。

「悪い、休むわ。」

そう言うと隆一はがつくりと肩を落とした。

「またか．．．。理由は何？」

「体調不良。」

「はあ．．．。先輩に連絡する僕の身にもなってよ。」

「すまん。これで最後だから。」

「その台詞、何度も聞いたよ．．．。」

■ ■ ■ ■ ■

隆一と別れて俺は帰路につく。

隆一には悪いが、何だか部活には当分出る気がしない。

何だか物足りない。

今の生活が不満な訳じゃない。

こついう当たり前な日常が幸せなものだということもわかっているつもりだ。

だけど、足りないんだ。

絶対的に、刺激が。「どうしちゃったんだろうな、俺。」

そんなことを考えている内に、家の近くの住宅街まで着いていた。もう夜だからか周りには誰もいない。不気味な程に。

「.....。」

何だか寒気を覚えた俺は住宅街を抜けようと足を速める。

その時だった。

「■■■■■!」

住宅街の路地裏から叫び声のようなものがかすかに聞こえた。

「何だ、何の音だ？」

不審に思い、いつもは行かない路地裏に足を向ける。

「
□□□□□□！」

また声が聞こえた。しかもさっきのものと違う声だ。二人いるのか？

さらに歩みを進めると、今までの狭い路地から、広場が続いている所までたどり着いた。

「・・・聞こえる、やっぱり二人みたいだな。」

広場に向かおうとしたが、俺の足は一本の糸に引っかかった。

「？　なんだこれ、悪戯か？」

路地から広場への入口にの糸が張られているのだ。その周りには模様らしきものも書いてある。

「・・・まあいいか、切るのも何だか気が引けるし。」

そうして俺は、その糸を飛び越える。

すると今までばやけていた声が急にはつきりと聞こえるようになった。

「終わりだ！ 吸血鬼！」

「ハッ、その程度じゃ、死にたくても死ねねえな！」

飛び交う罵詈雑言。

しかし最も驚くべきはその光景だった。

「何だよ・・・これ・・・。」

俺の前には、血だらけになりながら戦う男と、でかい楽器のようなものを使って応戦する少女、

そんな光景が広がっていた。

第二話（後書き）

一応書いておきますが、『真』の読み方は『まこと』ではなく、『しん』です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7702i/>

月姫 聖盾物語

2010年10月8日12時13分発行